

草子洗小町

観阿弥作

ワキ 大伴黒主
シテ 小野小町
狂言 黒主従者
ツレ 紀貫之および其他

子方（王） 帝

地は 京都
季は 四月

「是は大伴の黒主にて候。さても明日内裏にて御歌
合有るべしとて。黒主が相手には小野の小町を御
定め候。小町と申すは歌の上手にて。さらに相手
には叶ひがたく候ふ程に。明日の歌を定めて吟ぜ
ぬ事は候ふまじ。かの私宅へ忍び入り。歌を聞か
ばやと存じ候。

シテサシ
「夫れ歌の源を尋ぬるに。聖徳太子は救世の提闡。
片岡山の製を路生に弘め給ふ。

詞
「さても明日内裏にて御歌合有るべきとて。小町が
相手には黒主を御定め候ひて。水辺の草といふ題
を賜はりたり。おもしろや水辺の草といふ題に浮
びて候ふは如何に。時かなくに何を種とて浮草の。
波のうねく生ひ茂るらん。此歌をやがて短冊に
写しさぶらはん。

「如何に唯今のが歌を聞いて有るか。

「さん候承つて候。

ワキ 「何と聞いてあるぞ。

狂言

「蒔かなくに何を種とて瓜蔓の。 番のうねをまろび
ころびあるくらん。

ワキ

「いや左様にてはなきぞ。 道の道たるは常の道には
あらず。 知れるを以て道とす。 不得心なる事にて
候へども。 只今の歌を万葉の草子に写し。 帝へ古
歌と訴へ申し。 明日の御歌合に勝たばやと存じ候。
「めでたき御代の歌合。 く。 詠じて君を仰がん。

一同次第

サシ 「時しも頃は卯月なかば。 清涼殿の御会なれば。 花

やかにこそ見えたりけれ。

貫之 「かくて人丸赤人の御影を懸け。

一同 「おのくよみたる短冊を。 われもくと取りいだ
し。 御影の前にぞ置きたりける。

貫之 「さて御前の人々には。

一同 「小町を始め河内の躬恒紀の貫之。

貫之 「右衛門の府生壬生の忠岑。

一同 「ひだりみぎりに着座して。

貫之 「既に詠をぞ始めける。ほのぐと明石の浦の朝霧に。島がくれ行く舟をしそ思ふ。

地 「實に島がくれ入る月の。く。淡路の絵島国なれや。始めて歌の遊びこそ。心やはらぐ道となれ。

其歌人の名所も。みな庭上に並みるつゝ。君の宣旨を待ち居たり。く。

王詞 「いかに貫之。

貫之詞
「御前に候。

王 「始めより小町が相手には黒主を定めたり。まづ

く 小町が歌を読み上げ候へ。

貫之 「畏つて候。水辺の草。まかなくに何を種とて浮草の。波のうねく生ひ茂るらん。

王 「おもしろとよみたる歌や。此歌に優るはよもあら

じ。皆々詠じ候へ。

貫之 「畏つて候。

「暫く候。是は古歌にて候。

王 「何と古歌と申すか。

ワキ 「さん候。

王 「如何に小町。何とて古歌をば申すぞ。

シテ 「恥かしの勅諭やな。先代の昔はそもそも知らず。既に衣通姫此道の捨たらん事をなげき。和歌の浦わに跡を垂れ給ひ。玉津島の明神よりこのかた。皆此道を嗜むなり。それに今の歌を古歌と仰せ候ふは。

古今万葉の勅撰にて候ふか。又は家の集にて有るやらん。作者は誰にてましますぞ。委しく仰せ候へ。

ワキ 「仰せの如く其証歌分明ならでは如何でか奏し申すべき。草子は万葉題は夏。水辺の草とは見えたれども。読人しらずと書きたれば。作者は誰とも存ぜぬなり。

シテ 「夫れ万葉は奈良の天子の御宇。撰者は橘の諸兄。

歌の数は七千首に及んで。皆妾が知らぬ歌はさぶ
らはず。万葉といふ草子に数多の本の候ふか覚束
なうこそ候へ。

「げにく それはさる事なれどもさりながら。御身
は衣通姫の流なれば。あはれむ歌にて強からねば。
古歌を盜むは道理なり。

シテ 「さては御事は古の猿丸太夫の流れ。それは猿猴の
名を以て。我名をよそに立てんとや。正しくそれ

は古歌ならず。

ワキ 「花の蔭ゆく山賤の。

シテ 「其さま賤しき身ならねば。何とて古歌とは見るべ
きぞ。

ワキ 「さて詞をたゞさで誤りしは。富士のなるさの大将
や。四病八病三代八部同じ文字。

シテ 「文字もかほどの誤りは。

ワキ 「昔も今も。

シテ
「有りぬべし。

地「不思議や上古も末代も。三十一字の其内に。一字
もかはらでよみたる歌。是れ万葉の歌ならば。和
歌の不思議と思ふべし。さらば証歌を出だせとの。

宣旨度々下りしかば。初めは立春の題なれば。花
も尽きぬと引き開く。夏は涼しき浮草の。是こそ
今のがなりとて。既に読まんとさし上ぐれば。我
身に当らぬ歌人さへ。胸に苦しき手を置けり。ま
あやふき心は隙もなし。

シテ
「恨めしや此道の。大祖柿の本の太夫君も。小町を
ば捨てはて給ふか恨めしやな。此歌古歌なりとて。
左右の大巨其外の。局々の女房達も。小町ひとり
を見給へば。夢に夢見る心地して。さだかならざ
る心かな。此草子を取り上げ見れば。行の次第も
しどろにて。文字の墨つき違ひたり。如何さま小

町ひとり詠ぜしを黒主立聞し。帝へ古歌と訴へ申さん為めに。此万葉に入筆したると覚えたり。あまりに恥かしうさぶらへば。清き流れを結び上げ。此草子を洗はゞやと思ひ候。

貫之
「小町は左様に申せども。もし又さなき物ならば。青丹衣の風情たるべし。

シテ
「とにかくに思ひまはせども。やるかたもなき悲しさに。

地
「泣くく立つてすごくと。帰る道すがら。人目
さがなや恥かしや。

貫之詞
「小町暫く御待ち候へ。其由奏聞申さうするにて候。如何に奏聞申し候。小町申し候ふは。唯今の万葉の草子をよくく見候へば。行の次第もしどろにて。文字の墨付も違ひて候ふ程に。草子を洗ひて見たき由申し候。

王詞
「實にくく小町が申す如く。さらば洗ひて見よと申

貴之
し候へ。

「畏つて候。如何に小町勅諭にて有るぞ。急いで草子を洗ひ候へ。

地 「其時御前の人々は。黄金の半挿に水を入れ。白金の盥取り添へて。小町が前に置きたりける。

シテ 「綸言なればうれしくて。落つる涙の玉だすき。結んで肩に打ちかけて。既に草子を洗はんと。

地次第 「和歌の浦わの藻塩草。く。波寄せかけて洗はん。

シテ一声 「天の川瀬に洗ひしは。

地 「秋の七日の衣なり。

シテ 「花色衣の袂には。

地 「梅の匂ひやまじるらん。

ロング地 「雁金の。翅は文字の数なれど。跡さだめねば顕は

れず。穎川に耳を洗ひしほ。

シテ 「濁れる世を澄ましけり。

地 「旧苔の鬚を洗ひしは。

シテ
「川原に解くる薄氷。」

地 「春の歌を洗ひては。霞の袖を解かうよ。」

シテ
「冬の歌を洗へば。／＼。」

地 「袂も寒き水鳥の。上毛の霜に洗はん。／＼。恋の

シテ
「歌の文字なれば。忍草の墨消え。」

シテ
「涙は袖に降りくれて。忍草も乱るゝ。忘れ草も乱

るゝ。」

地 「釈教の歌の数々は。」

シテ
「蓮の糸ぞ乱るゝ。」

地 「神祇の歌は楓葉の。」

シテ
「庭火に袖ぞかわける。」

地 「時雨に濡れて洗ひしは。」

シテ
「紅葉の錦なりけり。」

地 「住吉の。／＼。久しき松を洗ひては。岸に寄する白波を。さつと掛けて洗はん。洗ひ／＼て取り上げて。見れば不思議やこは如何に。数々の其歌の。」

作者も題も文字の形も。少しも乱るゝ事もなく。
入筆なれば浮草の。文字は一字も。残らで消えに
けり。有難やく。出雲住吉玉津島。人丸赤人の。
御恵かと伏し拝み。悦びて龍顔にさし上げたりや。
ワキ詞
「よくく物を案ずるに。かほどの恥辱よあらじ。
自害をせんと罷り立つ。

シテ
「なふく暫く。此身皆以て。其名ひとりに残るな
らば。何かは和歌の友ならん。道を嗜む志。誰

もかうこそ有るべけれ。

王詞
「如何に黒主。

ワキ
「御前に候。

王
「道を嗜む者は誰もかうこそ有るべけれ。苦しから
ぬ事座敷へ直り候へ。

ワキ
「是れ又時の面目なれば。宣旨をいかで背くべき。

黒主御前に畏る。

地
「實に有難きみぎんかな。小町黒主遺恨なく。小町

に舞を奏せよと。おの／＼立ちより花の打衣。風

折鳥帽子を着せ申し。笏拍子を打ち座敷を静め。

シテ
「春来つては。あまねく是れ桃花の水。

地
「石にさはりて遅く来れり。

シテ
「手まづ遮る花の一枝。

地
「桃色の衣や重ぬらん。

シテ
「霞たつ。(舞)

シテ
「霞たてば。遠山になる朝ぼらけ。

地
「日影に見ゆる松は千代まで。松は千代まで。四海
の波も四方の国々も。民の戸ざしもさゝぬ御代こそ。
そ。堯舜の嘉例なれ。大和歌の起りは。荒金の土
にして。素盞鳴尊の。守り給へる神國なれば。花
の都の春ものどかに。くく。和歌の道こそめでた
けれ。